

すが……有難いよりは寧ろ勿体ない感に打たれる、何でもお客様にお土産を差上げる工夫をせねばなりません、有形の物質的でなく無形の精神的資料、大東亞戦下に於ける義勇奉公、苛烈決戦に臨み乍らも、悠々迫らざる大國民の襟度は敵米英を吞吐する氣概を示さなくてはならぬ。この精神的淨瑠璃を傳播強調、國風を堅牢につくり上げて、君國に奉るてふ大任務を遂行する程の大夫が出て、三味線人形も共に三位一体となり盡瘁ありたいと念する次第。が何をいふても人物拂底を慨嘆せざるを得ぬ、緊禪一番精神修

チヨボ問答

甲 君は淨瑠璃界のチヨボなるものを知つてゐるか。

乙 竊聞にしていまだその出典を知らぬ

甲 芝居の床で語る大夫をチヨボと稱するのだ、原則としてチヨボは節と地だけで詞は語らぬ、そして節と地は文樂の大夫と何ら異るところはないが、淨瑠璃界の異端者として文樂の大夫とは公然交際が出来ないことになつてゐる。

乙 それでなぜチヨボと稱するのだ。

甲 大夫なるものは最初高貴の御方より授けられた「官名」であるから、相當權威を有

養技藝鍛錬に奮進努力が肝心要めと思ひます。云々……斯くの如く決戦下の淨瑠璃は單に娛樂であつてはならぬ風教の模範となるべきもの、思想善導。平和親愛、凛として國民を指導する雄々敷き志操、文章、曲節みな新しき昭和の大文字、新曲符で、其の一句一節悉く淨瑠璃魂の具現でなくては、國民が受け入れぬ。大夫、三味線、人形にも相當の教育がなければならぬ。奮へよ、奮へ。終幕の下りぬ前に奮へ！

してゐる。然るにチヨボは大夫と絶縁した異端者だから、官名も職格もなく勝手に、「大夫」の名を冒用してゐるのだ。

「大夫」なる官名も本當は「たいふ」と呼ぶのだがそれが、音訛されて「たゆう」となつてゐる、然し語源の上からは、「たいふ」であらねばならぬ。

乙 そこでチヨボの出典は……。

甲 傳説によると、天保頃のこと、或師匠より破門された弟子の大夫が芝居の淨瑠璃語りとして出演した、然し「何々大夫」として番附に載せられることは師匠に對して憚りありとの良心から「大」の中に、を打つ

て「太」とし、爾來「太夫」の文字を用ひたのだ、即ちチヨボを打つたので後年芝居の床に出る淨瑠璃語りをチヨボと稱するのだ。

乙 だが今日の文樂座の番附を見ても、紋下以下一様に、を打つた「太夫」の文字を用ひてゐるのではないか。

甲 僕は常にこれを怪訝としてゐる、大夫連が何故番附の文字訂正を抗議しないのか、大夫連が職格を誇負するに餘りにも無關心ではないか、恐らくチヨボの出典を知るならば必らずや抗議するだらう。

乙 同感々々。